

授業指導案作成を通じた 児童英語指導者育成の試み

三 木 徹

はじめに

新学習指導要領の実施に伴い、平成14年度(2002年度)より、「総合的な学習の時間」の「国際理解」に関する学習の一環として「外国語会話」、特に「英会話」を小学校の段階で行なうことが可能となった。平成13年(2001年)に文部科学省が発表した『小学校英語活動実践の手引』(以下、『手引』)の第1章に「国際理解」と「英会話」の関係、および、「英語活動」のねらいと活動のありかたが挙げられているが、前者においては、体験的な学習、問題解決的な学習、外国語によるコミュニケーション能力といった表現が繰り返し使われ、また、後者の「英語活動」のありかたの項目では、日常生活に身近な英語を扱うこと、活動は音声中心であることの2点に重点が置かれている。さらに、『手引』の第2章では、第1章で示した方向性をより具体化し、内容を決める際のポイントと扱う言語材料、語句・表現に触れている⁽¹⁾。

このように、小学校での英語活動については、『手引』という形で一定のガイドラインが設定されているが、実際に「英語活動」を行なう小学校の現場では、こうした指針を生かすべく、どのような取り組みがなされているのであろうか。この点については、JASTEC(日本児童英語教育学会)関西支部のプロジェクト・チームによる「総合的な学習の時間」における英語学習に関する実態調査が参考となろう(以下、「実態調査」)。この「実態調査」は平成

12年度時点における公立小学校での英語学習状況を調べたものであり、対象は近畿2府4県内の316市・町・村教育委員会となっている⁽²⁾。回答を得た159教育委員会の管内管轄公立小学校数は1537校であるが、教育委員会が実態を把握していなかった校数が471校あり、調査対象校は1066校である。「実態調査」によると、平成12年度の時点で実施中、並びに平成13年度から実施予定の小学校が全体の30.5%を占めており、平成13年度、もしくは14年度からの実施について検討中、および平成13年度、もしくは14年度からの実施について検討する必要があるかどうか思案中と回答した小学校が全体の59.0%に及んでいる。実施する計画無しとの回答は10.4%に止まっている。こうした数字から判断すると、平成14年度からはかなりの小学校で「英語活動」が実施されるものと考えられよう。

1. 小学校における「英語活動」の問題点

小学校の「英語活動」への取組みは我が国の英語教育にとって避けて通ることのできない課題となっており、解決を急ぐ問題点も多々認められる。そのひとつとして挙げられるのが、指導者の確保とその育成であろう。「実態調査」によると、平成12年度の時点で実施中の小学校において担任が単独で英語を担当している校数は全体のわずか9.5%であり、他は、担任とALT (Assistant Language Teacher) のTT (Team Teaching) か、ALT単独といった授業形態を採用している。「実態調査」はこの点について、「現に、ALTとのTTに関して、一貫性の無さ、打ち合わせの難しさ、短期的(短絡的)になりがち、との問題点も指摘されている。」と述べ(p. 53.)、ALTへの依存過剰に対して警告を発している。また、「実態調査」は、実施校が挙げた問題点として、担任の英語力、準備のための肉体的、精神的負担、指導者確保の難しさ等を列記しており、こうした問題点の解決策のひとつとして、「日本人非常勤講師、地域のボランティア、ゲストティーチャーを今後積極的に活用する方法を検討すべきである。また、中・長期的には、担任および英語専科教諭養成を目的と

した研修プログラムの充実が強く望まれる。」と提言している (p. 57.)。

この「実態調査」の提言を執行し、必要な数の指導者を確保するためには、しかるべき教育機関において指導者養成のための教育・訓練の課程が必要となることは言うまでもなからう。小学校の現場で直接英語教育に関わるにせよ、小学校教諭のための研修プログラムを担当するにせよ、早期英語教育に関する理論と指導技術を高いレベルで習得した人材の育成が大学・短期大学における英語科教育研究の重要な課題となることは明白である。大谷女子大学英語英米文学科では、平成 14 年度からの新カリキュラムにおいて「児童英語教育論」という講座を開講するが、それに先立ち、筆者の担当する 3 回生のセミナーで児童英語教育を取り上げ、児童対象の英語クラスで使用する指導案作成に取り組んでいる。これは、平成 13 年度の大谷女子大学公開講座の一環として開講する 5~7 歳児を対象とした英語教室での利用を前提とした作業であり、実践を通じた児童英語教育の指導方法習得を目的としたものである。以下の章において、指導案作成までの準備、具体的な指導項目、指導案の例を挙げていきたい。

2. 指導案作成までの準備

2-1. 確認事項

前章で述べたように、英語英米文学科では平成 13 年度大谷女子大学公開講座の一環として「英語で遊ぼう」という児童対象英語教室を開講する⁽³⁾。この英語教室用の指導案作成に取り組む前に、セミナーでは以下の点を確認しておいた。

対象児童：英語を初めて習う 5~7 歳児

開講時間：約 1 時間とし、午前と午後それぞれ 1 回開講する。

授業目的：小学校での「英語活動」への導入とし、英語という言語への興味・関心を育てる。

- 注意点： 文字はなるべく使用せず、音声中心の活動を主とする。
 コミュニケーション活動に重点を置く。
 ゲームおよび歌を活用し、身体活動を通じた言語習得を中心とする。
 家庭でも保護者と児童が利用できる指導方法を提示する。

以上が指導案作成上の前提条件となる確認事項である。音声中心、コミュニケーション活動、ゲームおよび歌の活用はすべて『手引』にも重要なポイントとして挙げてある項目であるが⁽⁴⁾、本英語教室では、それに加え、家庭においても児童とその保護者とが利用可能な活動を組み入れる点に重点を置いた。これは、対象児童の大半が小学校への就学前と予想されるため、小学校での「英語活動」への橋渡しとして、児童が日常生活の中で英語に触れる機会を持つことが興味・関心の持続のために必要と判断したからである。

2-2. 参考教材

指導案を作成する際にいくつかの教材・資料を参考としたが、ここでは松香フォニックス研究所が企画・制作した『Hi-Bye English』を紹介するに止めたい⁽⁵⁾。このビデオは全8巻であるが、指導案作成に際しては、その第1巻のみを鑑賞した。これは、セミナーの時間的制約もあるが、入門期の児童対象を念頭に置いた場合、第1巻が最も参考になるであろうと判断した結果である。全8巻とも3部構成となっており、各部は基本的な4つの英語表現の反復学習と「お天気のコナー」、「ゲスト・コナー」、「友達をつくろう」という国際交流・理解を目的としたセクションとの組み合わせの形を採っている。第1巻の内容は次の通りである：

Part 1	Part 2	Part 3
①Hi!	⑤Where're you from?	⑨Ouch!
②Bye!	⑥I'm from Japan.	⑩Are you all right?

(24)

- ③How're you doing? ⑦What's your name? ⑪Let me try.
④Pretty good. ⑧My name is Masami. ⑫This is fun.

以上が第1巻の基本的な英語表現であるが、ここでは国際交流・理解に関するセクションの内容紹介については割愛する。上記の表現は、①～④は日常生活上の基礎的なコミュニケーション活動、⑤～⑧は個人情報の交換、⑨～⑫は感情・意志の表現とそれに対する反応と大きく分類することができよう。以上の表現の中から、それらのカテゴリーを考慮に入れ、英語教室の軸となるものを決定する作業に取り組んだ。

2-3. 指導案アウトラインの決定

指導案のアウトラインを決定する際に考慮すべき点は対象となる児童の年齢と英語教室の授業時間であろう。初めて英語に触れる児童対象の教室であり、時間も1時間という制限がある以上、日常生活上の基本的な表現を反復して練習する活動が妥当である。基礎的な表現をさまざまな形式の活動の中で提示し定着を図るべきと考えられる。こうした点を踏まえた上で検討した結果、『Hi-Bye English』第1巻の中から以下の項目を指導案の軸として取り上げることとした：

- ① Hi!
- ② Bye!
- ③ How're you doing?
- ④ Pretty good.
- ⑤ What's your name?
- ⑥ My name is. . . .

この6つの表現は①と②、③と④、⑤と⑥がそれぞれ対をなすが、こうした対話表現の反復練習により、指導者対児童および児童対児童のコミュニケー

ション活動がさまざまな形で可能となる。また、以上6表現の練習の間に、次に挙げる項目のいずれかひとつ、または2項目の組み合わせをひとつ挿入し、授業に幅を持たせることとした：

- A：色の名前 (red, blue, yellow, white, black, green, etc.)
- B：身体の部位 (head, eye, nose, ear, hand, leg, etc.)
- C：動作 (turn around, jump, run, stand up, sit down, etc.)
- D：食物 (apple, banana, pear, melon, grape, grapefruit, etc.)

この4項目の場合、単独で取り上げることも可能であるが、AとD、およびBとCを組合わせて活用することもできよう。また、以上の4項目以外に、数字や動物を取り上げて可とした。

2-4. 6表現についての留意点

前項において基本軸となる6つの表現を紹介したが、これらの表現を利用したコミュニケーション活動を考えるにあたり、特に注意したい2点を挙げておきたい。まず、③How're you doing? と④Pretty goodである。従来、会話練習ではHow're you doing? (もしくは、How are you?) の応答として必ずI'm fine, thank you. (または Pretty good.) が使用される傾向にあった。しかし、現実の生活の場においてはさまざまな感情表現がなされており、児童の発話をひとつの形式のみに縛るのは真のコミュニケーション能力育成の目的からは逸脱していると言えよう。この点を鑑み、③の応答表現に幅を持たせるべく、多種多様な感情表現の導入も考えておきたい。次に挙げる表現がその一例である。

I'm happy. I'm sad. I'm angry. I'm hungry. I'm sleepy.

また、⑤What's your name?と⑥My name is. . . . であるが、指導案作成の

際には⑤と⑥の順番を入れ替え、⑤My name is. . . ⑥What's your name? という形を採ることとした。これは、自らの名前をまず先に述べるという対人コミュニケーションの基本的な礼儀を考えてのことである。子供達は母国語である日本語においてもコミュニケーション能力を習得していく重要な過程にある。対人関係を周囲との関り合いの中で学んでいく上で、こうした基本的な礼儀を身に付けていくことも必要であり、児童英語教育は言語活動を通じた全人格形成にも寄与すべきである点を強調しておきたい。

3. 指導案の例

前章で述べたアウトラインと留意点に従い、学生は指導案作成に取り組むわけであるが、この章では指導案の第1案をまず提示し、その問題点を検討する。その次に、指摘された問題点を踏まえた上で修正された第2案を紹介したい⁽⁶⁾。作成は、まず、個々の学生が指導案を作成し、その指導案の問題点を検討・修正していくという過程で行なったが、学習項目とアウトラインを同意事項として事前に決定していたために、個々の指導案に大きな違いは生じていない。公開講座までの日程を念頭においての作業であったのでこうした作業過程を採ったわけであるが、学生個人の自由な発想を引き出すという点からは見れば問題があろう。この点は今後の課題として検討していきたい。ここでは、代表的な学生の指導案を1件のみ取り上げることとする。

3-1. 指導案第1案

①挨拶 I (10分)

学習内容： 英語であいさつを行なう。(A: Hi! B: Hi!)

- 目的：
- ・子供達と子供達、指導者と子供達の仲を親密にする。
 - ・相互のコミュニケーションを通してその場の雰囲気を作る。

留意点： (1) 子供達の前で模範会話を行なう。

(2) 全員で輪になり横の人に声をかけていく。

②挨拶 II と感情表現 (10分)

学習内容： A: How're you doing? B: I'm fine./ I'm sad./ I'm happy./
I'm hungry. Etc.

目的： 感情を表す表現をゲームの中で身体を動かしながら楽しく覚える。

留意点： (1) それぞれの感情表現とポーズを練習する。

(2) 全員がお互いに聞き合う。

(3) ひとりの指導者が How're you doing? と尋ね、もうひとりの指導者が You're ○○./Girls are ○○. と言って、○○に入る語をポーズで示す。子供はそのポーズを見て答える。

③自己紹介 (10分)

学習内容： 名前を聞き合う。(A: What's your name? B: My name is...)

目的： ・友達の名前を英語表現を使って尋ねる。

・交友関係を広げる。

留意点： (1) 複数のグループを作り、その中でお互いに名前を尋ね合う。

(2) 名前を聞いた後、Nice to see you. と言って握手する。

④動作を表わす表現 (10分)

学習内容： 動作に関する表現 ("Left and Right"⁽⁷⁾)

目的： 音楽を使って楽しくわかりやすく動作に関する基本表現を習得する。

留意点： (1) 最初に手本を示し、動作を教える。

(2) 全員で音楽に合わせて身体を動かす。

⑤自分の好みを相手に伝える。(10分)

学習内容： 自分の好みを伝える表現 (I like～.)

色を表わす語彙 (red, yellow, green, black, orange, pink)

果物の名前 (apple, banana, melon, watermelon, orange, peach)

目的： 身近な果物の名前とその色を表わす単語を覚え、自分の好みを英語で表現する。

留意点： (1) 果物とその色を示すカードを子供達に繰り返し見せ、単語を習得させる。

(2) カードを使ってカルタゲームを行なう。

(3) 取ったカードの果物、または色で、I like～. と言う。

⑥Story Telling (10分)

学習内容： 数と動物に関する内容の絵本を読み聞かせる。

目的： 絵本を通して、数を表わす語と動物の名前を習得する。

留意点： ・興味を持つように、ゆっくりと繰り返し読む。

・動物の名前と数のところを強調する。

⑦お別れの挨拶-Bye!

以上が指導案の第1案であるが、この案に関しては次に挙げる問題点が指摘されよう。

①挨拶 I

・具体的にモデルは誰が行なうのか？(指導者2名か、人形を使うのか?)

②挨拶 II と感情表現

・ポーズで示すより、絵カードを使うほうが良い。

③自己紹介

・まず、自分の名前を先に言うべきである。

・名前を尋ね合う際、どういう形で行なうのか？

全体に関する問題点

- ・④、⑤、⑥を全て行なうのは多すぎる。
- ・個々の事項の定着が不十分になる。
- ・単に「教える」のではなく、「どのように教えるのか」を考える。

3-2. 修正後の指導案

①挨拶 I (10分)

学習内容： 英語で挨拶を行なう。(A: Hi! B: Hi!)

- 目的：
- ・子供達と子供達、指導者と子供達の仲を親密にする。
 - ・相互のコミュニケーションを通してその場の雰囲気を作る。

- 留意点： (1) 指導者 2 名が子供の前で模範会話を行なう。(人形使用)
- (2) 円になって横の人に声をかけていく。

②挨拶 II と感情表現 (10分)

学習内容： A: How're you doing? B: I'm fine./ I'm sad./ I'm hungry.
Etc.

目的： 感情を表す表現をゲームの中で身体を動かしながら楽しく覚える。

- 留意点： (1) 絵カードを利用し、感情表現とそのポーズを見せる。
- (2) お互いにポーズをつけて会話練習を行なう。
- (3) ひとりの指導者が How're you doing? と尋ね、もうひとりの指導者が You're ○○./Girls are ○○. と行って、○○に入る語をポーズで示す。子供はそのポーズを見て答える。

③自己紹介 (10分)

学習内容： 名前を聞き合う。

(A: My name is. . .What's your name? B: My name is. . .
Nice to see you.)

目的： ・友達の名前を英語表現を使って尋ねる。

(30)

・交友関係を広げる。

- 留意点： (1) 複数のグループを作り、指導者が2名ずつグループに入る。
(2) グループの中でAとBのパートを繰り返して提示する。
(3) 聞き終わった後、Nice to see you と言って握手し別れる。

④動作を表わす表現 (10分)

学習内容： 動作に関する表現 (“Left and Right”)

目的： 音楽を使って楽しくわかりやすく動作に関する基本表現を習得する。

- 留意点： (1) 最初に手本を示し、動作を教える。
(2) 全員で音楽に合わせて身体を動かす。

⑤お別れの挨拶-Bye!

以上が修正後の指導案である。大きな変更点は、数および動物の名称と I like ~. の表現練習が削除されたところであろう。細かな点では、絵カードや人形といった補助教材の採用が目ざされよう。児童に教える場合、文字の使用が制限されるため、絵カード、人形、玩具といった補助教材を積極的に活用する必要がある。ただし、どういう形で、そして、どういう場面で補助教材を使用するのかといった具体的な手順までは修正案でも明らかではない。個々の活動の具体的な手順や言語材料の提示方法まで詳細に検討する必要があるだろう。

3-3. 具体的な活動案

指導案が完成した後に必要な作業は個々の場面での具体的な活動案であろう。指導者の後に続いて鸚鵡返しのように単語・語句・文を繰り返す単調な練習では言語表現の定着は望めないだろう。Hi (Hello) という簡単な表現を定着させるだけでも工夫が必要である。例えば、松香 (pp. 10-11.) の指摘する指導上の留意点は次の通りである：

- 1 机のない空間が理想
- 2 声を出したり、体を使うクラスに慣れる。
- 3 日本語でいちいち解説しない、訳さない。
- 4 カタカナをふらない。
- 5 徹底的に遊ばせる。
- 6 単語で教えないで文単位で教える。
- 7 国際的なマナーを養成する。
- 8 リズムを使って繰り返す。
- 9 先生の日本語を減らす。

以上9つの留意点の特徴は大きく分ければ、①英語を通しての英語学習 ②身体活動を通しての英語学習の2点に集約されよう。例えば、自己紹介という学習項目に活かす活動事例として、松香 (p. 29.) は次のような活動をあげている：

S 1: My name is _____. (胸を指して)

What's YOUR name? (手で相手を指して、YOUR のところを強く)

S 2: My name is _____. (胸を指して)

S 1 & 2: Nice to meet you. (握手をして)

- 1 発表例を参考に、ジェスチャー付きの会話文を全員で練習する。
- 2 先生はある子どもとペアになって見本を示す。
- 3 ペアを決めて会話を練習する。会話を覚えたら、2人ずつ前に出て発表する。
- 4 発表が終わったら拍手をして、先生も子供も That's great! 等と言ってほめる。

こうした例を参考とし、3-2. の指導案を活性化しうる個々の具体的な活動

(32)

案作成への取組みが次の課題となる。次に挙げる案は実際に学生が考案したものである：

S: Hi! (列の先頭の子供が指導者のところまで走ってくる)

T: Hi!

S: My name is _____. What's your name?

T: My name is _____.

S & T: Nice to see you. (握手をして)

(この後、自分の列の最後尾まで走って戻る)

- 1 数グループに分かれた子供が縦一列に並ぶ。
- 2 数名の指導者がそれぞれ各グループの先頭から 10 メートルほど離れて立つ。
- 3 合図と共に先頭の子供は指導者のところへ走っていき、例に挙げた会話をする。
- 4 会話が終わると子供は自分の列の最後尾まで走り、そこに並ぶ。
- 5 次に 2 番目の子供が指導者のところまで走り、同様の会話をする。
- 6 以上の形式でグループ間の競争を行なう。

(指導者の代わりに子供が交代で各列から離れて立ってもよい)

以上が活動の一例であるが、この活動と先に引用した活動例とを組み合わせることも可能であろう。また、こうした組み合わせにより、指導者対多数の子供、指導者対一人の子供、一人の子供対一人の子供、複数の子供対複数の子供といった多様性に富んだ対人コミュニケーション活動を教室内の限られた時間内で行なうことができるのではないだろうか。

こうして作成した活動案を指導案の中に織り込み、模擬授業による数回のリハーサルが英語教室に備えた作業の最終段階となる。頭だけで理解しておくのではなく、自ら身体を動かして個々の学習活動を覚えておくことが重要であ

る。また、こうした模擬授業の中では、実際の英語教室で使用する歌やダンスの練習も必須項目である。先に提示した指導案では身体と動作の学習活動において“Left and Right”を教材として挙げていたが、同様の活動目的に適した歌として、例えば、“The Hokey-Pokey”の採用を考慮してもよからう⁽⁸⁾。こうした様々なゲームや歌を活用することで、ともすれば単調になりがちな基本表現の反復練習を子供達にとって興味深く、退屈しない言語活動へと変えていくことが可能ではないだろうか。

ま と め

以上、英語教室に関わる前提条件の確認、参考資料の検討と学習項目の選別、指導案のアウトラインの決定、留意事項の確認といった過程を経て、指導案第一案の作成、問題点の指摘、最終案への修正へと至るわけである。最終指導案作成の後は個々の学習活動を具体化し、指導者自らがリハーサルを通して指導技術を習得することとなるが、実際に教室という現場での実践とそこでの子供達からの反応が、言うまでもないことだが、最も重要であり貴重な指導者育成のための糧となる。児童英語の指導者育成に関しては、まだ明確な方向性を打ち出した方法論も教科教育法も確立していないのが現状であるが、一番の問題点は、中・高英語教員養成課程における教育実習に相当する実地経験活動が現段階では極めて困難なことである。幸い、平成13年度は、公開講座の一環として行われる児童対象の英語教室に参加する機会を得た。今後、何らかの形でこうした教室が開講できれば、大学における児童英語指導者育成の道も拓けていくのではないだろうか。

注

- (1) この点に関しては、『手引』、pp. 5-13. に具体的な語句・表現の例が挙げられている。
- (2) 新学習指導要領への移行期間である平成12年度から、前倒し的に「英語活動」を行なうことが認められている。
- (3) 本論執筆は平成13年10月である。従って、本論においては指導案作成作業のみ

を取り上げ、参加者の反応を含めた英語教室の実践報告については別の機会に譲りたい。

- (4) 『手引』, pp. 5-7. 参照
- (5) 参考資料・文献に関しては本論文末尾に参考文献としてまとめているが、映像資料としてはNHK教育放送の『えいごリアン』をセミナー受講生に薦めている。また、インターネット上の有益な資料として <http://www.genkienglish.com/> が挙げられる。ここのホームページには主に小学生を対象とした様々な英語活動の事例集がまとめてあり、指導案作成において非常に参考となった。
- (6) 指導案作成の際には児童英語インストラクターである松村由利子氏から多くの貴重なコメントとアドバイスを戴いた。この場を借りて謝意を表したい。
- (7) “Left and Right” は Richard J. Graham 制作の CD である *Genki English!! Vol. 1.* に収録されている歌である。この歌は左右・前後といった方向を示す表現と日常の動作を示す表現の習得を目的としており、歌詞は次の通りである。

Left and right,	Left and right,
Forward and back.	Forward and back.
Left and right,	Left and right,
Forward and back.	Forward and back.
Left and right,	Left and right,
Forward and back.	Forward and back.
Left and right,	Left and right,
Forward and back.	Forward and back.
Sit down, stand up.	Spin around, sit down.
Turn left, turn right.	Stand up, spin around.
And jump, jump	And jump, jump
Jump, jump, jump!	Jump, jump, jump!

- (8) Pamela Conn Beall & Susan Hagen Nipp (1981) *Wee Sing AND PLAY*. Los Angeles: Price Stern Sloan, p. 19. この本には他にも数多くの歌が収められており、児童英語の指導者にとっては非常に貴重な教材集である。“The Hokey-Pokey” の歌詞は次の通りである。

You put your right hand in.	2. You put your left hand in . . .	9. Head
You put your right hand out.	3. Right foot	10. Whole self
You put your right hand in	4. Left foot	
And you shake it all about.	5. Right shoulder	
You do the hokey-pokey,	6. Left shoulder	
And you turn yourself around.	7. Right hip	
That's what it's all about!	8. Left hip	

参考文献

- 影浦 攻(編)(2001)『小学校英語活動マニュアル 1~4』東京:明治図書.
- 木村由利子(1996)「早期英語教育における歌とライムを使った指導」『九州女学院短期大学学術紀要』、第23号、pp.97-108.
- 久埜百合(監修)永井淳子・粕谷恭子(著)(2000)『うたって遊ぼう 小学生の英語の歌』東京:小学館.
- 椎名 仁(編)(2000)『ここから始める小学校「英語活動」』東京:ぎょうせい.
- 東京都文京区立誠之小学校(編)(2001)『総合的な学習「国際理解・英語活動」の具体的な展開』東京:小学館.
- 中本幹子(1999)『We are Japanese やねん』東京:アプリコット.
- 松香洋子(1999)『小学生は英語が大好き 72 Activities 1 基礎編』東京:松香フォニックス研究所.
- 文部科学省(2001)『小学校英語活動実践の手引』東京:開隆堂.
- JASTEC 関西支部 調査研究プロジェクトチーム(2001)「『総合的な学習の時間』における英語学習に対する実態調査—近畿地区内の教育委員会を対象とした質問紙調査に基づいて—」『日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要』、第20号、pp.47-60.
- Beall, Pamela Conn. & Nipp, Susan Hagen. (1981) *Wee Sing AND PLAY*. Los Angeles: Price Stern Sloan.
- Claire, Elizabeth. (1988) *ESL Teacher's Activities Kit*. Paramus: Prentice Hall.
- Moon, Jayne. (2000) *Children Learning English*. Oxford: Macmillan Heinemann.

映像・音声資料

- 松香フォニックス研究所『Hi-Bye English 1』(ビデオ)
- Graham, Richard J. *Genki English Vol. 1*. (CD)
- Beall, Pamela Conn. & Nipp, Susan Hagen. *Wee Sing AND PLAY*. (CD)

